

第2回安佐南区地域包括エリア毎在宅医療連携推進会議に参加して

ドレミ薬局 大前 進

3月25日、安佐南区総合福祉センターにて開催された第2回安佐南区地域包括エリア毎在宅医療連携推進会議に参加いたしました。

安佐南区においては安佐南区医師会が主体となり在宅医療推進拠点整備事業が行われています。高齢者の増加、価値観の多様化に伴い、病気をもちつつも可能な限り住み慣れた場所で自分らしく過ごす「生活の質」を重視する医療が求められており、このため在宅医療を提供する機関等を連携拠点として、多職種協働による在宅医療の支援体制を構築し、医療と介護が連携した、地域における包括的かつ継続的な在宅医療の提供を目指すことを目的としてこの事業は設けられています。今回の会議は「医療と介護の連携」と「顔の見える関係づくり」をさらに推進するために開かれました。

まず始めに、安佐南区医師会副会長の村田先生の挨拶と参加者全員の自己紹介が行われました。そしてこの事業について医師会、歯科医師会、薬剤師会、ケアマネージャー等多職種それぞれのこれまでの取り組みと各会議で挙げられた意見の報告があり、その後「在宅医療をすすめるうえで必要なこと」をテーマにグループディスカッションが行われました。



時間の関係もあり自己紹介は所属、職種、名前だけの簡単なものでしたが、連携という観点から多職種で集まり、顔の見える関係をつくることは非常に意味のあるものと感じました。またこの事業に関するこれまでの各職種での会議の報告からは専門性をどのように在宅医療に生かし関わっていくかということと同時に他職種との連携を強める方向性が示されていました。

私の参加したグループディスカッションでは医師の増田先生から顔のみえない関係性の中で、他の職種に対し指示書を書くことへの責任感について複雑な思いがあることをお聞き

しました。また医療では中心的役割の医師が在宅チームという点においては浮いた存在に感じられることなどが今後の連携上の課題であるとお話があり、これらに他職種がどう関わるかが議論の中心となりました。印象的だったのは増田先生が前回この会議に参加された直後、同じグループの参加者を通じて早速一人の患者の助けになれたという体験談で、連携という点でこの会議の意義が実感できるお話でした。

各グループ発表では在宅看取りや、がん末期の方を在宅で支援するには、などテーマを絞り込んで議論をされたところもありました。その他、薬剤師の関わりとしては担当ケアマネージャーの名前が簡単に分かるようにお薬手帳に名刺を貼り付ける提案や、在宅での服薬指導は行っているが横のつながりが少ない現状、介護保険証自体みる機会が少ない薬剤師の実情なども発表の中にありました。また薬剤師が行う日常業務での一包化提案や残薬確認を契機として在宅医療にかかわった事例報告など、在宅医療の窓口としても地域薬局が機能を果たせることが紹介されました。

日々在宅医療の視点を持ち、職種間の連携を意識して、相談・要請があったとき、また気になる患者さんの存在が確認できた時、地域の在宅チームの一員としてすぐに行動に移せることが求められています。「やってみたらできませんでした」では許されませんが、始めてみないことには薬剤師として在宅医療も連携も成し得ないと考え、そのためには慎重にまず持続可能なものを選定し、できるところから取り掛かる体制づくりが必要と感じました。

在宅医療・介護が抱える課題は多いとあらためて認識しましたが、活発な提案、意見交換が終始なごやかな雰囲気のもとに行われたことは、在宅医療連携推進に不可欠な顔がみえる関係づくりにおいてとても有意義なものであったと感じました。

